

北海道近現代史研究会・第六回現地視察レポート —胆振五市町を訪ねて

正木浩司

はじめに

公益社団法人北海道地方自治研究所の設置する「北海道近現代史研究会」は、二〇二二年一二月九日（一）一日の日程で、第六回目の現地視察を実施した。今回向かったのは胆振地方である。

同研究会では、二〇二〇年八月から二〇二二年七月までの期間に、計五回の現地視察を実施している。第一回の道南、第二回のオホーツク、第三回の釧路、第四回の石狩北部および中・南空知、第五回の江別市への各視察を経て、今回の訪問先に胆振地方を選んだのは、伊達市への関心が強い動機となっている。

伊達市への関心を高めたのは、一つは同市有珠町地区にある「善光寺」である。様似町の「等澍院」、第三回視察で訪れた厚岸町の「国泰寺」と合わせて「蝦夷三官寺」と総称される、道内最古の寺院

である。第二は、亘理伊達家の開拓の事績への関心である。第四回視察で当別町などを訪れた際、

伊達邦直率いる岩出山伊達家の土族開拓の歴史を学んだが、邦直の実弟、伊達邦成の率いる亘理伊達家が開拓を進めたのが、市名にも残るとおり、

現在の伊達市に他ならない。これら過去の視察で学んできた歴史への理解を、記憶がまだ新鮮なうちに深めていきたいということが、伊達市を含む胆振地方を今回選択した前提にある。

そのため今回は、伊達市を出発地とし、室蘭市、登別市、白老町、苫小牧市と順に東進していく、

胆振地方の横断ルートを組み立てた。移動の足には前回までと同じくレンタカーを利用した。

大枠のテーマとして想定したのは、蝦夷三官寺建立の背景をなす幕領期蝦夷地の状況、明治期以降の士族開拓のほか、登別市や白老町が訪問先となることから、アイヌ民族の歴史・文化について深く学ぶことも期待された。本稿はこの第六回現

地視察について概括的に報告することを目的としている。

1. 伊達市巡察、まずは善光寺へ

今回の視察の旅程は一泊三日としたが、参加メンバーの都合により、一日目は移動に終始した。この日は全メンバー揃って札幌駅から伊達紋別駅へ鉄道で向かい、到着後直ちに伊達市内でレンタカーの受け取りを済ませ、市内の宿泊施設に一泊した。

明けて二日目、午前八時半すぎに宿を出発し、北西へ二〇分ほど、洞爺湖町と境界を接する市西端、有珠町地区に急行した。ここに最初の視察先とする「浄土宗大白山道場院善光寺」（伊達市有珠町一二四）があり、事前に同寺関係者と午前九時に訪問するとの約束をしていた。善光寺は現役の浄土宗の寺院だが、境内一帯が「蝦夷三官寺」

の一つ「善光寺跡」として、国や道からも指定を受ける貴重な史跡である。⁽³⁾

蝦夷三官寺の設置は一八〇四（文化元）年、徳川第一代将軍家斉（在位一七八七～一八三七年）の時代である。ロシア対策（南下政策への牽制）のほか、アイヌ民族の教化、蝦夷地で死亡した和人の供養などを目的に、当時の要所三カ所を選定してそれぞれに寺院が建立された。この年は、一七九九（寛政一一）年に東蝦夷地が直轄化されて五年後に当たり、この後さらに、いわゆる「ヴォストフ事件」（一八〇六～一七九年）の発生を機に蝦夷地全域が幕府の直轄下に置かれることに

なる。蝦夷三官寺の設置のタイミングは、蝦夷地全域が幕領化されるプロセスの過渡期に当たる。善光寺の現在地は、付近に船着場を有したとされる「有珠会所」が設置されていた要所であり、蝦夷三官寺としての建立を機にこの地に移転している。同寺には九世紀の開基まで遡る前史があり、善光寺という寺名は一六一三（慶長一八）年、松前藩初代藩主の松前慶広が訪問し、阿弥陀堂を再建した際に付けられたという。蝦夷三官寺としての建立以降、現在の八雲町から白老町の範囲で布教活動を開始し、有珠山噴火の発災時には避難を余儀なくされつつも、今日に至るまで浄土宗の寺

＜付表＞ 第6回現地視察の主な視察先

第1日目(22.12.10)

	史跡・施設名	所在地
1	淨土宗大臼山道場院善光寺 — 善光寺跡／宝物館	伊達市有珠町124
2	有珠会所跡	伊達市有珠町86
3	バチラー夫妻記念堂	伊達市向有珠町119
4	伊達神社	伊達市末永町24-1
5	崎守神社 — 東蝦夷地南部藩陣屋跡 台場・勤番所跡	室蘭市崎守町187
6	室蘭市民俗資料館（とんてん館）	室蘭市陣屋町2丁目4-25
7	東蝦夷地南部藩陣屋跡モロラン陣屋跡	室蘭市陣屋町2丁目
8	中嶋神社 — 輪西屯田兵旧火薬庫跡／同記念碑	室蘭市宮の森町1丁目1-64
9	登別市郷土資料館	登別市片倉町6丁目27-2
10	刈田神社 — 片倉家主從開拓記念碑	登別市中央町6丁目24-1
11	知里幸恵 銀のしづく記念館	登別市登別本町2丁目34-7
12	知里真志保之碑	登別市登別本町3丁目25-3
13	登別市當富浦墓地 — 金成マツ之碑／知里幸恵之墓	登別市富浦町188-1

第2日目(22.12.11)

	史跡・施設名	所在地
1	白老アイヌ民族記念広場 — アイヌ碑／高橋房次先生之像	白老町高砂町2丁目2
2	民族共生象徴空間（ウボボイ） — 国立アイヌ民族博物館 ほか	白老町若草町2丁目3
3	白老八幡神社	白老町本町1丁目1-11
4	仙台藩白老元陣屋資料館	白老町陣屋町681-4
5	白老仙台藩元陣屋跡	白老町陣屋町681
6	勇払開拓史跡公園 — 蝦夷地開拓移住隊士の墓	苫小牧市勇払132
7	勇払ふるさと公園 — 勇武津資料館 — 開拓使三角測量勇払基点跡	苫小牧市勇払132

補足視察①(23.05.19)

	史跡・施設名	所在地
1	北海道大学植物園 — バチャラー記念館 ほか	札幌市中央区北3条西8丁目

補足視察②(23.06.01～02)

	史跡・施設名	所在地
1	総合公園だて歴史の杜 — だて歴史文化ミュージアム ほか	伊達市松ヶ枝町・梅木町
2	曹洞宗龍振山大雄寺	伊達市元町18番地
3	苫小牧市美術博物館	苫小牧市末広町3丁目9-7

ここを午前九時の約束で訪れたのは、境内の「善光寺宝物館」内部の観覽に事前予約が必要とされ、その予約時間だったからである。寺に到着し、広い境内で本堂の外観や「官寺設置二〇〇年記念碑」などを眺めていると、程なく副住職の木立真理氏が現れ、宝物館の建物へと案内された。館内はし字型で、入室して直進すると突き当たる道有形文化財「釈迦如来立像」⁽⁴⁾を見ながら



善光寺の本堂（左）と庫裡

ら右に折れると、各種展示物の陳列スペースがある。展示物のうち、総数六二点に及ぶ所蔵「蝦夷三官寺善光寺関係資料」は、「幕府の蝦夷地政策やアイヌ民族史研究上重要な資料群」として二〇〇五年には国の重要文化財の指定⁽⁵⁾も受けた貴重なもの。このほか、経典や法具、円空作「聖観音像」⁽⁶⁾、アイヌ民族の衣服・生活道具なども展示される。木立副住職のガイドにより、寺の歴史と各展示物の時代背景を詳細に学ぶことができた。

寺を出るとすぐ目の前、道端の一角に、「有珠

会所跡」という史跡がある。現在の外觀は、フェンスで仕切られた狭小なスペースに説明パネルと草木があるだけだが、ここに遺構の一部（玄関口の踏み石）が遺されているという⁽⁷⁾。

有珠会所の設置は古く、正確な時期は不明ながら、慶長年間（一七世紀初期）の頃、松前藩による善光寺の再興の時期に重なると推定される。ここで運上金の収納、駅通人馬継立、通行人の宿泊、日用品の供給などの業務が行われ、場所請負制度における場所の拠点施設としての役割を果たしたとされる。会所は明治期初期に廃止されまるまで続き、後述する伊達邦成が一八六九（明治二年、支配地検分で初めて来道した際、本会所に到着したとされる⁽⁸⁾。

2. 「バチラー夫妻記念堂」を視察

有珠町の善光寺界隈を去つて隣りの向有珠町の



バチラー夫妻記念堂

住宅街を分け入っていくと、木々に囲まれた小高い丘の上に、古い石造りの建物が見えてくる。正面屋根上に十字架が据えられ、キリスト教の教会であることがわかる。この教会が次の視察先とした「バチラー夫妻記念堂」（伊達市向有珠町一一九）である。

施設名にあるバチラー夫妻とは、キリスト教の一派「聖公会」の宣教師である夫ジョン・バチラー（John Batchelor）と、その妻ルイザを指す。ジョン・バチラーは、北海道で主にアイヌ民族を対象とする伝道に生涯をかけて尽力したことで知られ

バチラー宣教師の北海道での活動は、一八八〇

（明治一二三）年の初の来道から、第二次世界大戦による日英関係の悪化を受けた一九四〇（昭和一五）年の国外退去まで、六〇年もの期間に及んだ。当初は函館を活動の拠点とし、その後、平取での

アイヌ語の習得を経て、幌別（現在の登別）および有珠へと拠点を移していく。彼が伝道活動を実践した地域は、札幌や釧路、樺太にも及んだといふ。その事績は、『アイヌ語新約聖書』の作成、教会や教育・福祉施設の設立など、多岐に渡る⁽¹⁾。

なお、彼の道内各地での伝道活動を通じてつくりあげられていったアイヌ民族との関係は、アイヌ口承文芸の伝承者として知られた金成マツ、その姪で養女となる知里幸恵へとつながっていく。この二人については後段で詳しく触れる。

現存するバチラー夫妻記念堂は、一九三七（昭和一二三）年一〇月、当時の向井山雄司祭のリーダーシップのもと、アイヌ語で「神の丘」と呼ばれていた現在地に建立された。向井司祭はアイヌ民族

る。

聖公会は、イングランド国教会の系統に属するキリスト教の一派で、「カトリックとプロテスターントに大別される西方キリスト教会の中で、（中略）両者の持つ要素を兼ね備え、その中間に位置する教派であるといわれてきました」と説明されている。日本への伝道は一八五九（安政五）年に始まり、「日本聖公会」の創設は一八八九（明治二二）年という⁽¹⁰⁾。

バチラー宣教師の北海道での活動は、一八八〇（明治一二三）年の初の来道から、第二次世界大戦による日英関係の悪化を受けた一九四〇（昭和一五）年の国外退去まで、六〇年もの期間に及んだ。当初は函館を活動の拠点とし、その後、平取でのアイヌ語の習得を経て、幌別（現在の登別）および有珠へと拠点を移していく。彼が伝道活動を実践した地域は、札幌や釧路、樺太にも及んだといふ。その事績は、『アイヌ語新約聖書』の作成、教会や教育・福祉施設の設立など、多岐に渡る⁽¹⁾。

なお、彼の道内各地での伝道活動を通じてつくりあげられていったアイヌ民族との関係は、アイヌ口承文芸の伝承者として知られた金成マツ、その姪で養女となる知里幸恵へとつながっていく。この二人については後段で詳しく触れる。

現存するバチラー夫妻記念堂は、一九三七（昭和一二三）年一〇月、当時の向井山雄司祭のリーダーシップのもと、アイヌ語で「神の丘」と呼ばれていた現在地に建立された。向井司祭はアイヌ民族

の出身で、バチラー夫妻の養女になつていたバチラーア重子の実弟に当たる。八重子は養父に付いて伝道活動に携わりながら、歌人としても名を残し、本記念堂が建立されている。本記念堂の完成をもつて現在の「有珠聖公会」が発足し、本記念堂は現在、日本聖公会北海道教区に属する二四の教会・礼拝堂の一つに数えられている。¹³⁾

視察当日、実際に入口前まで行くと、数人の人々が内部で作業をしている様子がうかがえた。彼らは「有珠聖公会」の教徒であり、聞けば、この日は一階を会場として音楽会が催されるということであつた。二階にはバチラー夫妻や八重子らの事績を紹介する資料室が設けられており、親切にもガイド役を引き受けさせていたいた教徒の男性から説明を受けながら、バチラー宣教師の北海道での伝道の功績や関係者たちについて学んだ。

なお、バチラー宣教師が札幌で活動した跡は「北海道大学植物園」札幌市中央区北三西八に残る。園内の「バチエラーメモリアル」と名付けられた建物は、彼が一九四〇年に国外退去になるまで使用していた、日本での最後の邸宅であり、現在は遺品などを収めた収蔵庫として使われているという。

3. 巨理伊達家の開拓の事績を学ぶ

有珠地区から市中心部に戻ると、「伊達神社」（伊達市末永町）の視察を経て、「総合公園」（伊達市末永町）へと向かった。一七.

史の杜」（伊達市松ヶ枝町）へと向かつた。一七. 三糸の広大な敷地内には、中核施設のカルチャーセンターのほか、市立の博物館施設「だて歴史文化ミュージアム」も整備されている。次の視察先は、このミュージアムと、同公園内に保存されている巨理伊達家関係の史跡群とし、今日の伊達市の基礎を築いた仙台藩・巨理伊達家の開拓の事績について学ぶことを念頭に置いていた。

伊達市ウェブサイト掲載の市の年表は、前史を除けば一八六九（明治二）年から始まる。仙台藩が戊辰戦争で新政府軍に敗れた後、大幅な減封処分を受けた巨理伊達家第一五代当主・伊達邦成は、北海道開拓に活路を見出し、一族・家臣とともに移住することを決意する。新政府より膽振国八郡¹⁴⁾の一つ有珠郡の分領支配を命じられ、支配地検分のために、すでに会所や善光寺が設置されていた有珠の地に到着したのが一八六九年一〇月のことであった。

冒頭でも触れたとおり、邦成は、当別開拓の功績で知られる岩出山伊達家の当主・邦直の実弟に当たる。邦成も岩出山伊達家の生まれだが、巨理伊達家に養子に出され、その後第一五代当主となつた経歴を持つ。伊達家を構成する家格の中では最高位に位置するのが「二門」であり、巨理伊達家は一門第二席の地位、岩出山伊達家は一門第八席の地位にあつた。¹⁴⁾

邦成らによる検分を経て、宮城の村々から第一次移住者団の二五〇人が渡道してきたのが一八七

〇（明治三）年三月で、第二次の七二人は同年八月に、最大規模となつた第三次の七八八人は一八七一（明治四）年二月にそれぞれ渡道し、人口は徐々に増えていった。移住者たちは、嚴冬や食料難に苦しみながらも、国内初の甜菜製糖所の建設（一八八〇年）などの実績を出し、この地の開拓を進めていくことになる。¹⁵⁾

現在の伊達市につながる行政制度の変遷について言えば、廃藩置県（一八七一年）に伴う分領支配制度の廃止および開拓使への管轄替えや郡区再編などを経て、「北海道」一级町村制度・二级町村制度¹⁶⁾の施行（一八九九年）に基づき、周辺六村¹⁶⁾を束ねて、巨理伊達家に由来する村名を持つ一级町村「伊達村」が発足するのが一九〇〇（明治三三）年のことである。その後、一九二五（大正十四）年に町制施行（「伊達町」への改称）、一九七二（昭和四七）年の市制施行（「伊達市」への改称）を経て今日に至る。

ところで、事前の調べが不十分だったと反省するほかないのだが、同ミュージアムは訪問日の一〇日ほど前から冬季休業期間に入つており、残念ながら入館は諦めるほかなかつた。

筆者が補足視察の名目で伊達市を再訪したのは約半年後。このときによく、ミュージアム内の常設展示の観覧と、公園内の隣接地に保存されている伊達家の「迎賓館」¹⁷⁾、邦成像、市制施行記念碑などの視察が叶つた。館内の常設展示は、実物の史料の展示のほか、年表や説明パネルが充実

しており、亘理伊達家に関することはもちろん、善光寺やバチラー宣教師に関する説明も豊富である。

亘理伊達家に関する施設としてはこのほか、前出「伊達神社」と「曹洞宗膽振山大雄寺」（伊達市元町一八）を紹介しておきたい。前者は、伊達邦成が御祭神（配神）の一柱として祀られている神社として縁が深い。後者は亘理伊達家の菩提寺であり、寺務所内に宝物館を整備し、ここには寺宝だけでなく亘理伊達家の開拓に関する史料も展示されている。



総合公園だて歴史の杜　迎賓館（旧伊達家住宅）

4. 室蘭市へ移動、南部藩出張陣屋跡を視察
視察二日目（二〇二二年一二月一〇日）に話を戻す。

伊達市の近世・近代史についてひとまず学び終え、正午ころに次の目的地である室蘭市への移動を始めた。国道三七号を南東方向に三〇分ほど、「崎守神社」（室蘭市崎守町）の視察を経て、陣屋町という地区に辿り着いた。この地区には、市立の総合博物館である「室蘭市民俗資料館」（室蘭市陣屋町二丁目）、通称「とんてん館」が設置されるほか、その隣接地には、地区名にもあるとおり、幕末期に造営された「陣屋」の跡が保存・公開されている。

江戸時代、幕府が蝦夷地の一部もしくは全域を直轄した期間は二回あつた。一八世紀末から一九世紀初頭（一七九九～一八二一年）における東蝦夷地直轄期および全蝦夷地直轄期といわれる「黒船来航」（一八五三年）を発端とする幕末期（一八五五年以降）の開国・開港の時期である。

蝦夷地への陣屋の設置は後者に関わる。函館開港に伴つて諸外国の船舶や人々の往来が活発化するなか、国防強化の方策の一環として、蝦夷地の開墾守衛を幕府より命じられた東北六藩（津軽、南部、会津、仙台、秋田、莊内）が、それぞれの領地・警衛地に造営した防衛拠点が「陣屋」である。¹⁸本部を「元陣屋」、出先を「出張陣屋」といい、

その他にも「屯所」などの関係施設が存在した。蝦夷地の開墾守衛を主任務とする、この蝦夷地警衛分治という体制からは、明治期初頭の分領支配考がうかがえる。

室蘭市陣屋町に遺る陣屋跡は、南部藩の出張陣屋の跡であり、方形・二重土塁を特徴とする。同藩は現在の渡島地方および胆振地方西部、函館から登別に至る噴火湾沿岸地域の警衛を担当し、元陣屋を函館に、出張陣屋を当時「絵鞆のペケレオタ」（アイヌ語で「白い砂浜」の意味）と呼ばれ



東蝦夷地南部藩陣屋跡モコラン陣屋跡（裏門）

ていた現在の室蘭市陣屋町に造営していた。諸外国との戦闘に用いられることは終焉なく、最後は明治維新の際に焼け落ちたとされる。⁽¹⁹⁾ 陣屋町に向かう途中、「崎守神社」に立ち寄ったのは、その境内の大半が、南部藩陣屋の一部である「ポロシレトの台場・勤番所跡」とされているからである。この室蘭市に遺る南部藩の出張陣屋跡は、一九三四（昭和九）年に「元室蘭南部藩陣屋跡」の名称で国の史跡指定を受けているが、一九七四（昭和四九）年に至って、前出「ポロシレトの台場・勤番所跡」と、森町砂原および長万部町に遺る「屯所跡」を追加した上で、現行の「東蝦夷地南部藩陣屋跡モロラン陣屋跡」に名称変更されている。⁽²⁰⁾

陣屋町を去ると、時間の都合上、白鳥大橋回りで全国有数の景勝地「地球岬」に立ち寄るルートは諦め、次の視察先へ。最短ルートの国道三七号をそのまま東進し、JR東室蘭駅のほど近く、「中嶋神社」（室蘭市宮の森町一丁目）へと向かった。

近世期の蝦夷地防衛、これを引き継ぐ明治期の北海道防衛ということで言えば、室蘭市内にはもう一つ、「輪西屯田」⁽²¹⁾ という屯田兵村の設置実績もある。その史跡が保存されているのが中嶋神社の境内に他ならない。

輪西屯田は、札幌市・江別市に入植した最初期（一八七五年～八六年）の兵村に次いで、一八八七（明治二〇）年五月から入植が始まった土族屯田であり、胆振地方では唯一の兵村である。別名「室蘭屯田」。一八八九（明治二二）年の第二次入

植も含ませ、戸数は二二〇戸に上り、鳥取、兵庫、福岡、佐賀、石川、愛媛六県の出身者で占められた。一八七一（明治五）年開港の室蘭港の防衛を主任務として設置されたためか、農耕不適地に設置されており、飲料水確保の困難さ、海風による塩害ともあいまつて、農業面での成果を思うように出せなかつた兵村である。⁽²²⁾

中嶋神社の現在地は元々は輪西屯田中隊本部の跡地である。境内に保存される輪西屯田の関係史跡は、「輪西屯田兵記念碑」と「輪西屯田兵旧火薬庫」の二つ。いずれも一九七二年三月二三日付で室蘭市の指定文化財（有形文化財）の指定を受けている。

5. 登別市へ移動、片倉家の登別開拓の事績を学ぶ

中嶋神社の視察を終えたところで、時刻はすでに午後二時を回っていた。ここまで昼食休憩もとらずに巡察を続けてきていたが、日の入りの早い冬場はとにかく先を急がされる。急ぎ登別市へ。

室蘭市から登別市へは国道三六号を真っ直ぐ北東へ進んできたが、JR幌別駅の手前で左に折れ、内陸方面へと進路を変更。駅前から道道三二七号（弁景幌別線）を北西へ一〇分ほど進むと、次の視察先が見えてくる。幌別ダムの手前、川上公園の隣接地に立地する「登別市郷土資料館」（登別市片倉町六丁目）である。同資料館は近世期の城

植も含ませ、戸数は二二〇戸に上り、鳥取、兵庫、福岡、佐賀、石川、愛媛六県の出身者で占められた。一八七一（明治五）年開港の室蘭港の防衛を主任務として設置されたためか、農耕不適地に設置されており、飲料水確保の困難さ、海風による塩害ともあいまつて、農業面での成果を思うように出せなかつた兵村である。⁽²²⁾

郭を模したユニークな外観をしているが、モデルはかつて仙台藩の所有していた城郭の一つ「白石城」という。⁽²³⁾

本施設は市立の総合博物館ゆえ、展示内容は自然から歴史まで広範にわたるが、ここで最も期待を寄せていたのは、仙台藩士・片倉家の登別（膽振国幌別郡）開拓の事績に関する展示である。仙台藩の士族開拓の事例としてはもう一つ、片倉家による幌別開拓の事績も忘れてはならない。

片倉家は仙台藩に仕えた重臣の家系であり、初代以来の代々の当主が「片倉小十郎」の名を継承したことでも知られる。この片倉家は一八七〇（明治三）年、太政官より命を受けた第一代当主・邦憲のもと、現在の登別の地に分領支配の統治者として入植した。⁽²⁴⁾ 初代景綱による拝領（一六〇二年）から江戸時代が終わる一八六八年までの約二六〇年間、片倉家が居城としていたのが、本館のモデルとなつている白石城に他ならない。

館内の三階は、片倉家関係の展示で占められるフロアである。甲冑や衣服の実物のほか、片倉家の幌別開拓の沿革はもちろんのこと、片倉家の系譜、伊達家の家格図とその中の片倉家の地位など、参考になる説明パネルが豊富に展示されている。展示物のうち、片倉家臣の日野愛憲が記した「明治二年以降片倉家北海道移住顛末」という文書は、当時の移住の状況などを伝える貴重な史料として登別市の指定文化財の指定を受けている。⁽²⁵⁾

と、この日最後の視察先へ急いで向かうことになった。

6. 「知里幸恵 銀のしづく記念館」を視察

JR幌別駅界隈から国道三六八号をさらに北東へ一〇分ほど走り、JR登別駅の手前あたりで登別本町地区の住宅街を分け入ると、この日最後の視察先「知里幸恵銀のしづく記念館」（登別市登別本町二丁目）に辿り着いた。最終入館は午後四時までとされており、直前に滑り込んだ。

本施設は、その名のとおり、「アイヌ神謡集」⁽²⁶⁾の編訳者として知られる知里幸恵をテーマとする民設民営の資料館である。施設名にある「銀のしづく」は、同書収録の最も広く知られた冒頭の一編「銀の滴降る降るまはりに」から。募金を財源に、二〇一〇年に創立された。施設の運営はNPO法人知里森舎⁽²⁷⁾が担つており、館の常駐スタッフは法人の会員によるボランティアという。



登別市郷土資料館



刈田神社 片倉家主従開拓記念碑

なお、片倉家主従の北海道移住も數次に分けて進められたが、このうち第三次の移住者団六〇〇人は、開拓使貴属編入を命じられた上、一八七一年（明治四）年一〇月、幌別ではなく石狩に入植している。この第三次移住者団の入植地が、当時「望月寒」と呼ばれた土地であり、その集落は故郷の名にちなんで「白石村」と名付けられた。白石村は一九五〇（昭和二五）年に札幌市に編入されるまで存続し、白石の地名は現在の札幌市白石区に残る。白石村開拓の沿革については、さらなる情報収集を進めた上で、機会を改めて報告したい。

資料館の観覧を終えて外へ出ると、時刻は午後三時過ぎ。先ほど来た道道三二七号を戻り、幌別駅近くの「刈田神社」（登別市中央町六丁目）に向かう。刈田神社は、由緒によると、起源は平安時代に遡るとされるが、明治期の片倉邦憲主従の入植時に、片倉氏の總守護神である刈田嶺神社・延喜式内社（宮城県蔵王町）からの御分靈を合祀りとされる。境内には「片倉家主従開拓記念碑」が建立されており、片倉家とのつながりを明示している。ここを足早に視察し、暮れかかる空のも

館は二階建てで、一階には知里幸恵に関する資料・史料が集成され、二階には弟の知里真志保や叔母で養母の金成マツら、幸恵をめぐる人々に関する資料が数多く展示されている。一階隅にある等身大と思しき幸恵の立像が特に目を惹く。

幸恵は一九〇三（明治三六）年、幌別郡登別村番外地の出身。六歳の時に叔母の金成マツの養女とされて、旭川市近文に移住している。マツが旭川市近文に新設された聖公会の伝道所で布教活動



知里幸恵 銀のしづく記念館 1階展示室

の第一人者とされる。金田一と幸恵の関係は、一九一八（大正七）年に金田一が近文のマツと幸恵の自宅を訪れたときから始まる。両者を引き合わせたのもバチラーハー宣教師の紹介であった。³⁰『アイヌ神話集』の発刊の後景には、バチラーハー宣教師と金成マツを結節点としてつながりえた幸恵と金田一の関係が垣間見える。

右記に關して興味深いのは、バチラーハー聖公会の宣教師がアイヌ伝道を進めるなかで、アニミズムの伝統的・民族的世界観の中で生きてきたアイヌの人々の一部が一神教であるキリスト教を受け入れたという事実である。金田一は、入信後の金成マツの様子について、「不思議な事に、キリスト教の信仰と、アイヌの神の信仰とを二つとも持つて、今日まで何の衝突も矛盾も感ぜずに暮らして来ている」と述べたという。³¹マツのような人物の内面において、二つの相異なる世界観・宗教観はどのように関係し合っているのか、そもそも相異なつてもいなか、等々、想像がかき立てられる。

記念館の観覧後、スタッフの女性の勧めもあり、近場にある二つの関係史跡にも直ちに立ち寄ることにした。まずは記念館のすぐ近所、市立登別小学校の隣接地に建立されている「知里真志保之碑」（登別市登別本町三丁目）へ。先述のとおり、真志保は幸恵の実弟で、北海道大学教授などを務め、アイヌ語研究で高い功績を有する。碑正面には大教授の自宅で行われた。金田一は東京帝国大学教授などを歴任した言語学者であり、アイヌ語研究

の譜集とは異なる表記が刻まれている。その後、市営富浦墓地（登別市富浦町）内にある「金成マツ之碑」と「知里幸恵之墓」を視察を足早に済ませ、登別市と白老町の境界付近、同町虎杖浜地区に建つ宿泊先へと向かった。

7. 白老町巡察、二つのアイヌ関係施設と仙台藩元陣屋跡へ

明けて最終日の三日目。白老町内の巡察から始まるこの日も、入館時間に「九時～一〇時」という縛りのある施設があり、虎杖浜地区の宿泊先からその施設までは車で四〇分ほどの距離にあるため、午前八時半すぎには宿を出発することにした。その施設とは「民族共生象徴空間」、通称「ウボポイ」である。

ウボポイまでの若干長い移動の途中、その後の巡察の効率性を考慮し、ウボポイよりも手前に位置する施設一カ所に先に立ち寄ることにした。「白老アイヌ民族記念広場」（白老町高砂町二丁目）である。白老町の歴史の基礎を築いてきたアイヌの先祖の歴史を顕彰し、アイヌ民族の精神文化を伝承保存するため³²に整備されたこの広場内には、莊厳な「アイヌ碑」が建立（一〇〇五年建立）されており、同碑の前で毎年八月、アイヌ民族による先祖供養祭が執り行われている。この広場は、「アイヌ碑」の碑文によれば「アイヌ民族のゆかりの地」であり、その理由として「アイヌの子弟

碑には、「先生の功績と恩義に酬ゆるべく（中略）町民挙つてこの胸像を建立し先生の偉業を永久に記念するものである」と刻まれている。

広場を去ると、いよいよウポポイへ。ウポポイは「民族共生象徴空間」の通称で、いわゆる「アイヌ施策推進法」^{〔4〕}に基づき、アイヌの歴史・文化を学び伝えるナショナルセンターとして二〇二〇年に開業したばかりの新しい施設である。敷地内には、道内初の国立博物館である「国立アイヌ民族博物館」のほか、体験交流ホール、伝統的コタン（家屋）群、慰霊施設などが整備される。このうち「国立アイヌ民族博物館」は、訪問日に先立つて、日時指定の入館整理券の取得が推奨されているため、今回の場合、この日の九時～一〇時の時間帯に入館することにしていた。

博物館内の展示室は二階にある。膨大な量の展示品について、写真撮影は許されたが、本誌のようないい刷物への写真掲載の可否の確認まではとれなかつたため、本稿での掲載は残念ながら控えなければならない。展示内容は一見に値する充実ぶりであったが、生活や信仰などの「文化」に関する展示が充実する半面、和人との関係も含む「歴史」に関する展示は相対的に少ないというのが、観覧後に当研究会が持つた感想である。

ウポポイの視察は二時間以上に及び、退出時の時刻はすでに正午近く。JR白老駅前のカフェで昼食をとつてから、次の視察先のある陣屋町地区へ向かつた。地区名にあるとおり、ここにも室蘭



白老アイヌ民族記念広場「高橋房次先生之像」(左)と「アイヌ碑」

碑には、「先生の功績と恩義に酬ゆるべく（中略）町民挙つてこの胸像を建立し先生の偉業を永久に記念するものである」と刻まれている。

広場を去ると、いよいよウポポイへ。ウポポイは「民族共生象徴空間」の通称で、いわゆる「アイヌ施策推進法」^{〔4〕}に基づき、アイヌの歴史・文化を学び伝えるナショナルセンターとして二〇二〇年に開業したばかりの新しい施設である。敷地内には、道内初の国立博物館である「国立アイヌ民族博物館」のほか、体験交流ホール、伝統的コタ

ン（家屋）群、慰霊施設などが整備される。このうち「国立アイヌ民族博物館」は、訪問日に先立つて、日時指定の入館整理券の取得が推奨されていて、今回の場合、この日の九時～一〇時の時間帯に入館することにしていた。

博物館内の展示室は二階にある。膨大な量の展示品について、写真撮影は許されたが、本誌のようないい刷物への写真掲載の可否の確認まではとれなかつたため、本稿での掲載は残念ながら控えなければならない。展示内容は一見に値する充実ぶりであったが、生活や信仰などの「文化」に関する展示が充実する半面、和人との関係も含む「歴史」に関する展示は相対的に少ないというのが、観覧後に当研究会が持つた感想である。

ウポポイの視察は二時間以上に及び、退出時の時刻はすでに正午近く。JR白老駅前のカフェで昼食をとつてから、次の視察先のある陣屋町地区へ向かつた。地区名にあるとおり、ここにも室蘭

市の場合と同じく、幕末期に造営された陣屋跡が保存・公開されている。

室蘭市に遺るのは南部藩の出張陣屋跡であつたが、白老町のものは一八五六（安政二～三）年に造営された仙台藩の元陣屋跡である。仙台藩の蝦夷地警衛の中心拠点だけあつて規模が大きく、主要部だけでも六万六〇〇〇平方㍍に及ぶ広大な敷地内に、高い土壘や掘割といった遺構が保存されている。^{〔5〕}仙台藩の領地・警衛地は、この白老の元陣屋を中心拠点に、広く道東の十勝・釧根エリア、さらには北方四島にまで及んでいた。一九六六（昭和四一）年には「白老仙台藩陣屋跡」の名で国の史跡指定も受けている。

仙台藩と北海道の関係は、明治期初頭から伊達家や片倉家による士族開拓が始まる前段で、幕末期（開国・開港期の一八五〇年代半ばから明治維新の一八六八年まで）の蝦夷地警衛分治の時期が直前まで続いていたということをここで確認しておきたい。

併設の「仙台藩白老元陣屋資料館」は一九八四年（昭和五九）年開業のテーマ博物館で、仙台藩や白老元陣屋に関する展示はもちろんのこと、幕末期の蝦夷地をめぐる国内外の情勢や、当時のアイヌ民族に関する説明も充実している。北海道の近世史を学ぶ上でお勧めの施設である。

高橋医師は一九二二（大正一一）年に四一歳で北海道立白老土人病院に着任し、同病院廃止後も含め、三七年にわたつてこの地で医療活動に従事したことから、地元のアイヌの人々からも慈父のよう慕われたといふ。^{〔3〕}「アイヌ碑」の隣りに建つ銅像は、この高橋医師の胸像に他ならない。像は一九五九（昭和三四）年建立。像傍らの顕彰

8. 苦小牧市勇払へ、八王子千人同心の事績 を学ぶ

白老町内の巡察を終え、残された時間も数時間となり、今次最後の視察先へ急ぐことにした。行き先は苦小牧市東部の勇払地区。白老町の中心部からは車で一時間以上かかる距離である。かつては「勇武津」とも表記された勇払地区は、江戸時代に場所請負制度の場所や会所が置かれて早くから栄えた土地であり、それゆえ「苦小牧発祥の地」ともいわれる。⁽³⁷⁾

午後三時過ぎにようやく勇払地区に辿り着き、

JR勇払駅の東側、「勇払ふるさと公園」と「勇払開拓史跡公園」（苦小牧市勇払一三二）という二つの公園が隣り合うエリアをめざした。前者には「勇武津資料館」が、後者には「蝦夷地開拓移住隊士の墓」という墓石群がある。



勇払開拓史跡公園 蝦夷地開拓移住隊士の墓



勇払ふるさと公園 勇武津資料館

○人が移住してきた。しかし、蝦夷地の厳寒の気候や飢えに苦しみ、病死者や帰郷者が続出したため、駐屯は四年ほどで中止となつたといふ。⁽³⁸⁾ 同公園内の墓石群は一八基あり、計二九名が祀られている。このうち、八王子千人同心からの移住隊士と会所役人らの墓が七基一二名という。苦小牧市では彼ら移住隊士の事績を顕彰し、この墓石群を市の指定文化財（史跡）に指定するととも

に、毎年八月にはこの場所で慰靈祭を行つてゐる。東蝦夷地が幕領化された際、蝦夷地の警備・開拓を幕府に願い出て、白糠と勇払の二カ所に計一〇心顕彰碑（苦小牧市旭町三丁目）も建てられて

いる。

隣接する「勇払ふるさと公園」内に設置されている「勇武津資料館」は、この地区の生活文化を伝える家具類やアイヌ民具、先述した八王子千人同心の移住の事績を伝える史料などを幅広く展示する施設である。市制施行五〇周年、八王子千人同心移住二〇〇年に当たる二〇〇一年四月の創設であり、館の外観は勇武津会所を、内部は同会所

の前身となつた運上屋のそれをそれぞれ模したものという。⁽³⁹⁾ 資料館の観覽を終えると、同公園の北端に位置する「開拓使三角測量勇払起點」を視察。これをもつて今回の全日程を終了し、札幌への帰路についた。

墓石群のある「蝦夷地開拓移住隊士」とは、一八〇〇～〇四（寛政一二～文化元）年の数年間、幕府の東蝦夷地の直轄期、この地で警衛の任に就いた、「八王子千人同心」という武士団に所属する者たちであつた。元々は甲斐の武田氏の家臣団であり、武田氏滅亡に伴つて徳川家康の支配下に置かれた後、時代が進むとともに幕府のもとで組織再編を受けながら、現在の八王子市の近郊で半士半農の生活を送つていたといふ。この武士団が担つた任務としては、将軍が京都や日光へ赴く際

9. まとめて—今次視察の感想と今後の展望

伊達市に遺る善光寺跡と亘理伊達家の開拓の事績への関心に導かれた今回、胆振地方での現地視察を振り返ると、当初の目的が果たせたことに一定の充実感を得られた一方で、江戸時代から明治期にかけて胆振地方を舞台に展開された、蝦夷地・北海道の警衛政策についても広範に学ぶことができ、また新たな視点を得られたと考えている。

今次視察で得た知見によれば、「幕府の蝦夷地警衛政策」としては、二つの時期に分かれる幕府直轄期にそれぞれの取り組みがあつた。すなわち、第一期（一七九九～一八二一年）に関わっては、善光寺など蝦夷三官寺の建立、勇払・白糠への武士団（八王子千人同心）の移住、胆振では有珠・白老・勇払に痕跡が残る会所の設置・再整備があり、第二期（一八五五～六八年）に関わっては、室蘭や白老をはじめ道内各地に陣屋跡が遺る東北諸藩の蝦夷地警衛の実施のほか、過去の視察で得た情報から補足すれば、後の屯田兵制度のモデルとされる「在住制度」もあった。これら幕府の蝦夷地警衛への取り組みは、明治政府にも継承され、北海道分領支配体制下で進められた士族開拓や、その後を継いだ屯田兵制度といった施策へとつながつていく。

今回はこれらの事項に関する史跡・史料が、当然ながら歴史上の時間軸には構いませんに、近世

と近代を何度も行きつ戻りつしながら、断続的に目の前に現れ続けたため、道中度々頭の中で混乱と確認をくり返すこととなつた。この混乱も今次視察の思い出の一つである。

ともあれ、場所請負制度の場所の区画、会所等の設置された地域、東北諸藩と各警衛担当地とのつながりなどは、今日の北海道の行政区画（郡、市町村）の成り立ちを考える上でも、その前史として某かの影響があつたのではないかと推察されるところであり、当研究所の本務からも重要なテーマと位置づけたい。

今回の成果としてはこのほか、特に伊達市と登別市で学んだとおり、パチラー宣教師によるアイヌ伝道の取り組みから、知里幸恵による『アイヌ神譜集』の発刊へとつながる歴史の中に、「アイヌ民族によるキリスト教の受容」という宗教学上も興味深いトピックが存在することにも気づかされた。宗派の違いを取り扱つて見れば、キリスト教は、明治期以降に北海道開拓に従事した民間会社組織の一部（北見の北光社、浦河の赤心社など）においても指導理念となつていていたことが知られている。キリスト教を切り口とする北海道の近代史への多角的なアプローチも、今後のテーマの一つとして念頭に置きたい。

当研究会の道内現地視察も今回で六回目に及び、この間に収集・蓄積してきた情報や資料も相当量に上つていて、「多角的な視点に基づく北海道の近現代史の再検討」という研究会発足当初

からの目的を堅持しつつ、今後も引き続き情報の収集と整理・分析に努めていきたいと考えている。

【注】

(1) 二〇一九年発足。二〇二三年一二月現在のメン

バーは、竹中英泰（旭川大学名誉教授／当研究所理事／当研究会主査）、押谷一（酪農学園大学教授／当研究所理事）、三輪修彪（北海道労働文化

協会理事／当研究所元専務理事）、正木浩司（当

研究所研究員／当研究会事務局）。第六回現地視

察には四人全員が参加し、本稿の執筆は事務局の

正木が担当した。

(2) 国の指定史跡への指定は、「善光寺跡」の名称で、

一九七四（昭和四九）年五月三日指定。また、

北海道遺産への指定は二〇一八（平成三〇）年一

月一日「蝦夷三官寺」として、第三回選定分（第

六二号）での指定を受けている。

(3) 本段落の善光寺の沿革については、善光寺のウェブサイトおよびリーフレットに掲載の「沿革」に基づく。

(4) 「祇迦如来座像」の名称で、一九五九（昭和三四）年二月二十四日、道の有形文化財に指定。

(5) 「蝦夷三官寺善光寺関係資料」の名称で、二〇〇五（平成一七）年六月九日、国の重要文化財に

指定・登録。

(6) 「円空作仏像聖観音像」の名称で、一九七七（昭

和五二）年三月一日、道の有形文化財に指定・登録。

(7) 伊達郷土史研究会（二〇二二）一九頁。

- (8) 本段落の記述については、現地設置の説明パネル記載の説明文と、伊達郷土史研究会（二〇二二）一九頁を参照した。
- (9) Bachelor のカタカナ表記は、管見の限り、「バチラー」と「バチエラ」の二通りが見受けられる。本稿では、視察した「バチラー夫妻記念堂」に倣つてバチラーを用いる。なお、後述する北海道大学植物園内の建物名は「バチエラ記念館」である。
- (10) 本段落の記述については、日本聖公会のウェブサイト掲載「聖公会とは」のページを参照した。
- (11) 本段落の記述については、有珠聖公会作成のバチラー夫妻記念堂の現地配布パンフレット、西原（二〇一三）一四一頁、大島（二〇一三）一六八一八〇頁を参照した。
- (12) 日本聖公会北海道教区のウェブサイトによる。
- (13) 膳振國の八郡は、山越、虻田、有珠、室蘭、幌別、白老、勇拂、千歳。
- (14) 伊達家の「家格」については、伊達一五〇年物語の会（二〇一九）三九頁および一四五頁と、後述する登別市郷土資料館の展示も参照した。
- (15) 亘理伊達家の移住団の人数については、伊達一五〇年物語の会（二〇一九）一三二頁、一三九頁、一四〇頁による。甜菜製糖所については、同書一七七～一七八頁による。
- (16) 東紋鼈、西紋鼈、稀府、黄金鱈、長流、有珠の六村。
- (17) 伊達邦成が北海道開拓の功で華族に列せられた記念に建てられたもの。皇族や政府高官の接待所、
- (18) 蝦夷地警衛の幕命が東北五藩に降りたのは一八五五（安政二）年。一八五九（安政六）年に莊内藩が追加された。一八六〇（万延元）年以降は仙台、会津、秋田、莊内の四藩体制に、一八六三（文久三）年以降は仙台、秋田、莊内の三藩体制に変わっていく。後述する仙台藩白老元陣屋資料館の展示の一つ「蝦夷地各藩の分地地図」を参照した。
- (19) とんてん館に展示の「南部陣屋」の説明による。
- (20) 嶠守神社の境内に設置の説明文による。
- (21) 有馬（二〇二〇）四八～四九頁。後述する中嶋神社境内に設置の記念碑に関する説明文も参照した。
- (22) 登別市ウェブサイト掲載「登別市郷土資料館」のページによる。
- (23) 片倉家の当主の系譜については、登別市郷土資料館の展示の当主一覧による。なお、最後に小十郎を名乗ったのが、後述の第一代当主・邦憲である。
- (24) 片倉家の幌別移住の経緯については、登別市郷土資料館に展示の「戊辰戦争の敗北と北海道移住」の説明文などを参照した。
- (25) 一九九三（平成五）年九月二日指定。
- (26) 『アイヌ神謡集』を最初に出版したのは郷土研究社で、一九二三（大正一二）年八月一〇日の発行とされている。中川（二〇二二）一〇八頁に表紙の画像が掲載されている。現在広く普及している岩波文庫版は、編集付記によると、右記の郷土研究社版を底本とし、若干の修正を施した上で一九七八（昭和五三）年に発行されている。
- (27) 記念館ウェブサイト掲載「知里森舎の歩み」によると、団体としては一九九七（平成九）年に発足し、特定非営利活動法人（NPO法人）の法人格の取得は二〇〇七（平成一九）年である。法人の目的として、「アイヌ民族の歴史・文化・自然観から学び、アイヌ文化を担つてきた知里幸恵をはじめとする人々の業績を正しく評価し、広く伝えてゆく活動を行うとともにアイヌ文化について関心を高め、その発展・普及・啓発・振興などに寄与すること」を掲げている。
- (28) 幸恵の年譜については、石村（二〇二二）二三五～二三六頁などを参照した。
- (29) 同右。なお、マツの受洗は「少女時代」とされ、実施時期の詳細は不明。従兄の金成太郎は、一八八五（明治一八）年にアイヌ民族で初めてキリスト教の洗礼を受けた人物。
- (30) 注28に同じ。
- (31) 石村（二〇二二）四一頁より引用。
- (32) 「白老アイヌ民族記念広場設置条例」（平成一七年六月二七日条例第二六号）第一条。
- (33) 北海道総務部文書課（一九六七）二〇七頁。
- (34) 正式な法律名は「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」（平成三年四月二六日法律第一六号）。民族共生象徴空間の設置の根拠法でもある。

